



ストラスブール 研修課題レポート

名古屋大学 教育学部 1年 学籍番号 021400357 野々村 陽

- ① アルザス地域の歴史
- ② 日本とフランスの生活、文化観の相違点、共通項
- ③ 異文化コミュニケーション

今回、2週間のストラスブール研修を終え、日本ではできないような素晴らしい経験をすることができた。その研修で学んだこととして、①アルザス、ストラスブール地域の歴史、②文化観の相違点、共通項、③異文化間コミュニケーション、の3点より、研修で学んだことへの考察も加えながら、書き記していきたいと思う。

① アルザス、ストラスブール地域の歴史

今回の研修では、様々な史跡や美術館を多く回ることができた。現地体験と相俟って、日本で学ぶよりもより深いところまで学べたと思う。現地での体験と合わせて、学んだ歴史について考察を加えながら書いていきたい。

アルザス地方は、私達が、今回の研修で訪れたストラスブールを州都とする、バ＝ラン県と、エクスカーションで訪れた、コルマールを州都とする、オー＝ラン県から成る、ドイツとの国境付近に位置する地域圏である。

実際に訪れてみて分かったことは、フランスといっても、かなりドイツ地域に根差した文化が流れているということである。文化遺産である、プティット・フランスの街並みに代表されるような、木骨造りで漆喰固めの家屋(Fachwerk)(写真 2)や、ドイツ料理のシュークルート(Sauerkraut)(写真 1)やベッコフ(Baeckeoffe)、ワイン蔵(写真 4)では、ゲヴェルツトラミナー(Gewürztraminer)やピノグリ(Pinot Gris)に代表されるような白ワインが中心に見られ、パン屋では、ドイツパンであるプレッツェル、といったように、その様相は街の随所で見受けられた。

このように、国境付近で互いの文化が混じり合うことは、極めて稀なことである。どうして、このような特異な文化圏が誕生したのか。それは、歴史の経緯を見ると明らかになる。博物館で学んだことをまとめると、以下のようになる。

まず、1648年に三十年戦争がヨーロッパ全体で起こると、その締結条約であるウェストフェリア条約によって、ドイツ(当時、神聖ローマ帝国)からフランスに、アルザス地域圏が割譲された。しかし、1870年、普仏戦争によって、アルザス地域圏はドイツの占領下に置かれることとなる。しかし、1919年、再び、ヴェルサイユ条約で、フランスは再び取り返す。ところが、1940年、第二次世界大戦でフランスが降伏すると、再びドイツに占領される、しかし、最終的にドイツも降伏し、再度フランスが占領して今に至っている。

このことから、フランスとドイツは自然と混じり合ったのではなく、度重なる戦争によって人為的に混じり合ったものであるという、負の側面を内包していることが分かる。ドイツ文化を好ましくないと感じている人も現地にはいたが、このような背景があつてのことだろう。

② 日本とフランスの生活、文化観の相違点、共通項

上の項でもアルザス地域の文化に少し触れたが、この項では、日本とフランスの文化、或いは文化観の相違点、共通項についての的を絞って、実際2週間滞在した経験を基に、書いていきたい。

まず、現地に着いて一番最初に驚かされたことは、交通全般についてである。通学の際、いつも目に飛び込んできたのは、夥しい数の縦列駐車と、信号を完全に無視している歩行者であった。

また、ホームステイ先には、山の上の教会に連れて行って頂いたのだが、そこに向かう際も、山道を 100km/h で走り抜けるなど、日本では考えられない場面が多々あった。

これだけ交通規則を無視していて、事故は多くないのだろうか。帰国後調べた所、やはり想像通り、事故は日本の 2 倍(10 万人当たりの交通事故死者数:内閣府データ)であった。日本が如何に普段から規則を遵守する国なのかが、日本を客観的に見ることができた今回の研修から、よく理解できた。

次に、日常生活で驚いた点は、とても挨拶(salute)が多い国だということである。カフェやパン屋の店員にも、大学で教師に会うときも、寮で同居している全く知り合いでない人に会うときも、挨拶を頻繁にしていた。

また、挨拶をする機会が多かったのも然ることながら、ボディコンタクトによる挨拶も多かった。握手や腕を合わせる動作は実際に自分もした。また、異性同性関係なく、互いの頬にキスをする(bise)といった、日本では絶対に遭遇しないような場面も、街中で見かけた。

さて、これら 2 つについては、日本と違う文化観の例として挙げた。その根本を辿ると、自分達で結束して(挨拶)、政府に頼らず、ルールに縛られることなく(交通マナー)自助努力で生きてきた、革命期の源流が今も残っているのだと思う。

しかし逆に、日本の文化を大いに受け入れている点もあった。街を歩いていると、かなり日本食の店を見かけた。私も、研修期間中、「松本屋」(写真 5)という日本食レストランを訪れた。店内にはアジア系の方が半分、フランス人が半分といった感じで、フランスの方が器用に箸(baguettes)を使って食事している風景には驚いた。

また、食文化だけでなく、世俗文化の中にも、日本文化が垣間見えた。代表的な物を挙げると、漫画である。書店には、かなり大々的に漫画のコーナーが設けられていた。「DRAGON BALL」や「ONE PIECE」のような、日本でメジャーになった作品は勿論、日本ではあまり見ないような作品まで売られていた。

さて、そのような風景に感動し、私も数冊漫画を購入したのだが、その中の 1 冊に、『聖おにいさん(仏題:Les vacances de Jesus & bouddha)(写真 6)』があった。これは、イエス・キリストと仏陀が、現代の日本に現れ、同居生活を始めるストーリーなのだが、宗教を基にしたギャグが至る所に盛り込まれている。宗教的な表現、特にキリスト教を扱う漫画は、絶対に規制されていると思っていたが、このように普通に売られていることには感動を覚えた。

昨今の、「休息日で礼拝日である日曜に、就業をしてはいけない」という法律に対する反対世論の高まりなどからも考えると、もしかしたら、今後フランスの宗教に対するスタンスは、日本のように、自由な形に近づきつつあるのかもしれない。

③ 異文化コミュニケーション

今回の研修では、現地学生の前でのプレゼン、日仏大使館での職員との交流、家庭訪問(写真 7)、フリータイムでの現地学生との食事会など、様々な機会で見地の方と交流することができた。恐らく、今までの人生の中で一番、外国語を使って話しただろう。そして、そのような体験の中で、

幾つかフランス人、或いは今後外国人と関わる上で大切な点を見つけることができた。

•tutoyer と vouvoyer の、日本とフランスの価値観の差

フランスには、tutoyer(二人称を tu を使って話す)、vouvoyer(二人称を vous を使って話す)という、珍しい動詞がある。英語にはこのような区別が見られない。逆に日本はもっと2人称が多様である。その為、英語や日本語に対応させて使い分けることが難しい。

それ故、日本人は、例え友人関係にあっても、丁寧語にあたる vous を多く使いがちな傾向にあるようだ。実際、私もかなり vous を多用していた。

しかし、実際の tu,vous は、私たちが日本語訳として対応させている「あなた」「君」よりも、大きな丁寧度の隔たりがあるようだ。vous が持つ敬意の度合いは、かなり他人行儀なものであるらしい。友人の間柄で使うことは殆どないそうだ。

このような現地での使われ方やニュアンスの微妙な違いは、現地人にしか分からないから、ぜひ今後ネイティブの人にあったら、積極的に聞いていきたいと思った。

•慮りの概念

家庭訪問先で昼食を頂いた際、「食べられない物があつたら遠慮なく言って」や、「私たちの声がうるさすぎたら申し訳ない」など、私たちを慮る言葉をよくかけて頂いた。特にフランス人は、自由奔放であるというイメージがあつた為、これには嬉しい驚きであつた。聞くと、「確かにフランス人同士で話すときは、遠慮なしに喋るが、他の国籍の人には、その人の立場に立って思いやる」とのことであつた。

日本人は、遠慮が多すぎるだとか、遠慮は他の国では逆に疎んじられる、といったことをしばしば耳にするが、その姿勢はやはり大事にしていきたいものだと思った。

•共通の話題、ジェスチャー

フランス人と話す中で、最もコミュニケーションに必要なのは、イメージが共有できる「共通の話題」と、「ジェスチャーを交えた会話」だということを痛感した。私にはどちらも欠けていると、今回の研修を通じて分かつたので、自分の趣味範囲を増やすこと、そして、日本では実際にジェスチャーを交えて会話というのは難しいので、もし今話している相手が外人だつたらどう身振りをするかを意識して会話すること、この2点を目標に生活していきたい。

•LINEかFacebookか

日本のSNSの主流は「LINE」であるが、現地で「LINE」のアカウントを取得しているのは、普段から日本などアジア地域の人と交流している人が殆どで、向こうのSNSは、「Facebook」が一般的であつた。それは、よりオープンなネットコミュニケーションをとりたいという思いの人が多くことや、フランスには十分な wi-fi 環境がなく、携帯ではなくコンピュータを介して通信する人が多いからであらう。

日本で普通に使用しているものが、海外では通用しないという大きな一例であつた。今まで個人情報保護の観点から警戒していた「Facebook」であるが、これを機に始めることにした。

•英語は人によってかなり通じる度合いが異なる

「英語は世界各国どこでも通じる」と言うが、実際は通じる人と通じない人の差が激しかった。むしろ感覚としては、英語が通じない人の方が多かった気がする。

日本では、「英語だけ出来れば良い」という考えが蔓延しつつあるが、将来グローバルに働くためには、他の外国語も学ぶ必要があると強く理解した。

研修に関わって頂いた先生方、スタッフの皆さんへ

安全な研修になるよう努めて頂き、有り難うございました。

皆さんのおかげで、安心して研修に臨むことができました。

この研修は、今後のフランス語学習、語学学習の指針となるものであり、将来のビジョンの拡充にも繋がった、自分にとって大変意義深いものでした。

これを皮切りに、将来ますます海外に挑戦できる人物になっていきたいです。



